

センター通信

朝鮮族にとっては、金日成のゲリラ活動に象徴されるように、朝鮮・韓民族独立運動の基点としての意味も担ったからである。こうした政治上・地勢学上の要所において、戦前期・戦中期に、とりわけ日本による教育がいかなる文化変容をもたらしたか、そしてそれが現在に至るまで、地域にいかなる影響を与えているのかを比較文化史・文化交流史的な見地から調査することが、今回の調査旅行（二〇〇九年八月四日～九日）の主たる目的である。

延辺地区は、かつては間島とも呼ばれたが、その南方には、朝鮮語の白頭山、中国語の長白山が存在する。この休火山は、朝鮮族にとって民族的崇拜の象徴であったばかりか、

延辺調査備忘録（上）

稲賀 繁 美

近代東アジアにおける文化交流を考える場合、中国東北部の東端に位置し、北には旧ソ連・ロシアに接し、東には北朝鮮に接する延辺地域は、特異な意義を担っている。まずこの地域は朝鮮族が人口の過半を占めてきた地域であり、現在でも中国語と朝鮮語が併用されている。またその地域的な特性ゆえに、戦前期より国際的にも地政学的な拠点となっていた。すなわち、南下を図るロシア・ソ連と、それを阻止しつつ朝鮮半島での権益を確保しようとした日本、さらには東北地方へと進出する漢民族の利害が重なるばかりか、とりわけ

満洲族にとっても祖先の發祥地として聖地の扱いを受けてきた、という事情も加わる。現在では山頂のカルデラ湖、天池の中央が、中・朝国境となつて直線で分割されているが、この線引きには、日本支配が関与している。すなわち、日韓併合に先立つ一九〇七年に、齊藤季次郎中佐率いる工作部隊とともに龍井村に潜入した篠田治策（一八七二〜一九四七）は、統監府間島派出所開設にあたり、総務課長に任命されているが、かれは国際法学者として、のちに「間島問題」を回顧し『白頭山定界碑』（楽浪書院、一九三八年）ほかを刊行している。平壤勤務を経て、李王職次官、長官を歴任した篠田は、「間島問題」の専門家であり、追つて京城大学第九代総長を勤めた（一九四〇〜一九四五）。この篠田の著作は、今日では韓国の一部の識者によつて、間島を韓国領土とみなす主張の根拠にも利用されている（李建志氏の教示。『朝鮮日報』二〇〇九年八月一三日付）。これに対して、北京政府側には、今日「間島」の呼称そのものを忌避する傾向も見られる（劉建輝氏の教示）。ちなみに、この長白山一帯は、満洲事変（一九三一年九月一八日）に端を発する、偽「満洲国」建国（一九三二年三月一日、建国宣言）後の一九三六年頃には、民間航空機による遊覧飛行の対象となつており、満

が多数を占める満洲国東端の、ソ連との国境地帯で発生した武力衝突だった。いわゆる第二次上海事変（一九三七年八月一三日）勃発の時点で、大日本雄弁会講談社の月刊雑誌『キング』には、多色印刷による、当時の少年向けの付録地図が、折り込みで添えられている。これを見ると、東端を張鼓峰、西端をノモンハンとして、その間に北にむかつて巨大な円弧を描く黒龍江に沿った満洲国国境の外側には、赤軍の駐屯状況が絵図で克明に示されている。ここには、「小国民」読者に北からの脅威を実感させようとする編集意図が、如実に窺われる。

アイグン条約（一八五六年）、北京条約（一八六一年）により沿海州はロシア領となつていたが、そのなかで、現在の中国領土は、図們江北岸に貼り付くようにして、東へと細長く尾を伸ばし、あと十五キロほどで日本海に出る地点で、北にはロシア国境、南には北朝鮮国境に挟まれて、途切れている。その突端に位置する防川の軍事地域は、ロシア・北朝鮮そして中国の三国の国境が接する場所であり、中国国境の数メートル先には、ロシアと北朝鮮をつなぐ鉄道橋が江を横切っている。日本敗戦後、中華人民共和国が成立して六〇年を経過した今日なお、中国にとっては、ここが沿海州・日

洲航空その他の定期航空路やその旅客運賃の詳細も、当時の史料から復元できる（稲賀襄遺品にみられる航空写真）。だがこのような航路の存在は、今まで、朝鮮・中国の専門家にもほとんど知られていなかった。こうした日本支配時代の事実が、その後長らく埋もれてきたことも、今回の現地調査による聴き取りから、あらためて確認された。

二

また延辺東端の防山地区は、地政学的にも重大な意味を担っていた。そのことは、中国国境の東側をなす図們江河口にある防山の間近に張鼓峰が位置していることから理解できる。いわゆる張鼓峰事件（一九三八年七月八月）は、ソ連側ではハサン湖事件と呼ばれるが、ソ連軍と日本軍とがこの地で衝突した事件である。それは一九三七年七月七日の盧溝橋事件をきっかけとする日中戦争勃発に続く時期の事件であり、三九年五月一日からの通称ノモンハン事件の前哨ともいえる。地図で確認すれば明らかのように、ノモンハンがいわゆる満蒙、すなわち満洲国に取り込まれた内モンゴル地域の西の外延における国境紛争であったなら（田中克彦『ノモンハン戦争』二〇〇九年、七五頁）、張鼓峰事件は、朝鮮族

本海に繋がる唯一可能な出口であり、とりわけ改革開放政策が活発化した一九九〇年代初頭、中国は国連開発計画（UNDP）重点事業の決定を追い風に、図們江河口へのアクセスを獲得しようと働きかけた。しかしこれには対ロシアとの国境画定問題が絡まっていたうえに、一九九二年の中・韓国交回復により中朝関係が冷却化し、北朝鮮側はこの地域の開発に消極的となった、といわれる。とはいえ、北朝鮮側としてみれば、中国に沿海州への港を与えることは、中国の領土獲得意欲を煽る愚を犯すばかりか、自国の経済利益にも損失を与えかねまい。むしろ北朝鮮領内を経由させることで、中国からの物流に北朝鮮側の港を利用させ、関税収入を得るほうが得策、との判断があったことだろう。中国側には立派な物資運搬路が完成しているが、北朝鮮との交易は決して盛んといえる状況にはない。また北朝鮮とロシアを結ぶ橋にも、列車が頻繁に行き交う風情はみられなかった。防川はもっぱら中国側のみの国境観光地と化しており、江沢民の碑文を頂いた招聘所と展望台ができてはいるが、対岸の北朝鮮側には人家も、耕作地も見当たらず、自然林が広がるばかり。

軍事地域入り口から展望台へは車で一〇分ほどの距離だが、暫く進んだ場所には、小規模な（私設の）張鼓峰記念館

とともに、清朝の光緒帝の時代の地方長官で、文人・書家として著名な吳大澂（一八三五—一九〇二）の巨大な石像が造られており、「竜虎」の筆跡ある碑文に右手を突いて、川を隔てた朝鮮側を見下ろすように睨んでいる。彼には図們江に中国船の航行を認めさせた功績が知られるが、その巨像が、あえてロシア側からは視認できぬ位置に据えられているのも、意味深長といつてよい。

三

この図們江開発には、日本企業も教社進出したという。そ



図版 1. 吳大澂碑
(撮影：稲賀繁美)

が第一外国語としてカリキュラムに組み入れられた（以下、延辺大学外国語学院日本語学部・孫雪梅教授よりの教示）。延辺以外の吉林省、黒龍江省、遼寧省でも朝鮮族中学校・高校では日本語を第一外国語とする学校が大多数であったという。このため大学への進学者も、日本語基礎知識をすでに身につけた高水準の学生からなり、日本語学部は人気学部として多くの応募者を集めた。卒業生も日本語教師として良好な就職状況にあった。

だが八〇年代後半から英語学習者が増加し、九〇年代を迎えると「英語一辺倒」という状況を呈する。九〇年から二〇〇一年までの統計を見ると、延辺州内大学受験者のうち、日本語学習者の率は九〇年の九〇・三％から、二〇〇二年には六一・八％まで低下した。これに伴い中学校・高校での日本語教師の需要も激減し、卒業生の就職難も顕在化する。これが先に述べた「出稼ぎ」を助長することとなり、延辺地域の朝鮮族の人材流出に繋がった、という。あわせて日本語初心者コースを新設する必要も生じ、学生の適性に応じた複式授業が導入されたため、結果的に教育的効果も低下を余儀なくされた。とはいえ、教員のレベルでは、二〇〇五年以降、人材流出には歯止めがかかっており、一九名の在職

の背景には、朝鮮系を中心として日本語に堪能な人材が豊富にあり、これを積極的に活用しようとの意図があった。だが開発計画が掛け声倒れのまま停滞するなか、延吉大学でも、語学教育における日本語の比重は近年軽くなり、かわって英語習得を希望する学生が増加している。人口動態を見ても、現地の朝鮮系の若者は、韓国あるいは日本、さらには近年では英語圏へと出稼ぎに出るのが夢であり、海外で儲けた金で故郷に錦を飾る志向が強い。実際、現在五〇万を超える人口を擁する延吉市の郊外には、大規模なマンションの建設がラッシュを迎え、新市街が形成されようとしていた。そしてその労働力不足を補うように漢族が流入しており、現状では朝鮮族が人口の六割弱を占めるこの政治・経済上の地域中心城市でも、漢族の人口比率がじりじりと高まっている。周辺を含めた延辺朝鮮族自治州全体では、総人口二二〇万のうち、漢族が五九％、朝鮮族が三八％という統計が報告されている。

日本語教育の経緯と現状について、さらに詳しく見ておこう。延辺朝鮮族自治州内で中学校・高校教育に外国語科目が復活されたのは、文化大革命終息後の一九七八年のことであり、それ以来、州内すべての朝鮮族中学校・高校では日本語者のうち、博士学位取得者が五名を教えるという。

以上のレポートは、あくまで日本語学部の内部資料に基づく報告であり、これは延辺朝鮮族自治州における朝鮮族の置かれた状況全般のなかで解釈される必要があるだろう。いうまでもなく、朝鮮族の出身者にとって、公用語の中国語を別とすれば、一番習得の容易な言語は日本語に他ならない。中国語を母語とする漢族にくらべて、日本語習得の容易さは比較になるまい。だが九〇年代を迎えて第二外国語教育に「英語一辺倒」の傾向が現れたのは、中国沿海部の一般的傾向に乗じたことに加えて、中国と韓国との国交回復の影響があったもの、とみるべきではないだろうか。基本的に中国語での意思疎通にさしたる困難を感じない朝鮮族出身者にとって（とはいえ、ある程度以上の社会的地位に相応しい水準の中国語を習得するのは、けっして容易ではない、と多くの朝鮮族大学関係者ほかからの証言を得た）、韓国系企業への就職が有利となれば、ソウルや上海、北京などの出稼ぎ先で、就職上有利な第二外国語は、もはや日本語ではなく、英語となる。黄海に迫り出した遼東半島の先端に位置する大連地域では、八〇年代後半から日本企業との提携が急速に促進された。それとは対照的に、日本海に面する図們江開発が事実上頓挫し

たことが、延辺地域での日本語教育の不振を間接的に助長した要因のひとつ、といえるのではなからうか。

四

ここまで延辺地域の文化状況を鳥瞰してみると、そこに戦前の日本支配が落とす影をみないわけにはゆくまい。日本語教育に限っても、延辺大学で文革終息後の七〇年代末に授業を担当した人たちは、戦前に日本語教育を受けた、当時五〇代半ばの朝鮮族によって占められていた。それ以前の人民中国建国期を見ても、地元で日本語による高等教育をうけた人材が、教育界のみならず、様々な分野に進出した様子が見える。そうした経緯を窺う格好の資料のひとつが、当時の中学校の同窓会名簿だろう。満洲国時代に日本の総領事館の置かれた近隣の龍井にあった光明中学校の同窓会会員名簿（一九八九年版、および九八年版の復刻）を拜見したが、八九年版の光明中学恩師として名前のある国内在任者には、石熙満（当時七五歳、元延辺藝術大学校副学長）、朴奎灿（当時七一歳、元延辺大学校長）の名前が見える。石先生は、延辺大学・日中韓語言文化研究所の現所長、李東哲さんの父君にあたるという。また、八九年段階でまだ退職していない

問わず、日本の教育を受けた多くの同級生が、反革命知識分子として紅衛兵から吊るし上げられた、との経験談も複数の方々から伺った。

金美源さんの場合には、五〇年代到北京の放送局勤務となり、アナウンサーとして日本語放送の企画にも参画している。日本支配下で習得した日本語の知識が職業上に生かされ、経歴の基礎となったわけだが、その一方、北京に出てみると、自分の中国語が不十分なこと気づかされ、普通話の習得のためにずいぶん苦労した、とも語っておられた。また金姫淑さんともども、中学時代はなつかしく、たいへん愛着があるものの、そうした少女時代のことを語らせてもらえない機会がなく、子や孫たちの世代に証言を残せない侘しさを感じてきたことも、正直に告白された。

これは龍井の光明中学校を卒業した、金国清さん（現在七九歳、漢族、現龍井居住）の体験とも重なる。一九四三年、小学校五年生のときに、選ばれて山本五十六の戦死を弔うべく、日本内地に派遣される児童代表のひとりに選ばれた彼は、旅順戦跡までは足を伸ばしたが、当時すでに対馬海峡の船舶航行が危険となっており、日本への派遣が中止となり、故郷に引き返した経験をもつ。だがこのとき旅順で建国

光明中学校出身の男性会員のほとんどが、教職あるいは大病院、出版関係ないし行政の要職についており、九八年版では海外会員（ほぼ半数以上）の多くがソウルを中心として、韓国に在住している。

一方、光明高等女学校は一九三〇年三月に第一回卒業生を出しており、同校の関係者としては、今回、延吉在任の金姫淑さん（一九二八年生、一九四五年卒業、一九八九年名簿では第一五回生、一九九八年名簿では第一七回生、元延辺百貨公司科長、日本名は金岩松子）と、金美源さん（一九二九年生、一九四六年一二月卒業、一九八九年名簿では第一六回生、一九九八年名簿では第一八回生、元延辺人民广播电台播音員）のおふたりから、ゆっくりとお話を伺う機会を得た。同学年の会員の大多数がソウルあるいは釜山に在住し、何人かが北米に在住している。八九年と九八年の名簿の住所異動を見れば容易に推察できるように、これは九〇年代に子弟が韓国や北米に住居を構え、それに頼って移住したもののようである。光明高等女学校は一九四五年の日本敗戦とともに統廃合されたため、四六年卒業生が最後となる。一般に女子の場合にも、医師、教員、会計士などの職についた割合が著しい。もともとこれが仇となって、文化大革命期には、男女を

忠靈廟春期大会に参加した履歴が発覚して、紅衛兵から反革命分子として糾弾された。それにもかかわらず、金さんは、中学の同窓会名簿、『一光会会報』創刊号（康德一〇年〓昭和一八年〓一九四三年）を今日まで手放さず所有していた。これは三百頁近い冊子である。また自らも長らく教職にあつた金先生は、龍井東山小学校の四年担任（一九四二年）だった山崎初子先生への思慕が断ち切れず、文革のあと、昭和五四年になって恩師の消息を探ったが、福岡県の役所からは、現住所変更、本籍地不明のため、追跡不可能との手紙が戻ってきた（六月二八日付け）。その小学校時代の記念写真も、文革の嵐を生き延びて、今日まで大切に保管されていた。

五

このように書くと、あたかも延辺では日本による支配が歓迎されていたかの印象を与えかねない。だが当時の間島省は、抗日活動が盛んなことで有名な地域だった。龍井第四中学校には、旧私立大成中学校の建物が保存されており、記念館となっている。展示は二つにわかれる。まずかつての校舎は「龍井中学歴史展覧館」として、延辺地区の教育史を展示している。言うまでもないことだが、日本支配下の教育に関

する部分は削除され、いかに侵略者に対する抵抗運動がなされてきたかの歴史が、教育すべき正史として示されている。とりわけ間島で少年時代を過ごし、龍井の恩真中学に在籍した夭折の詩人、尹東柱（一九一七～一九四五）は大きく扱われ、記念館の前に石碑も置かれている。よく知られるように、光明中学校を経て、平壤の崇実中学校に移り、さらにソウルの延禧専門学校（現在の延世大学校）文科を経て、一九四二年立教大学英文科選科に入学し、同年京都の同志社大学に移った尹東柱は、ここで治安維持法違反の容疑で逮捕され、四五年一月一六日に福岡刑務所で獄死する。没後、愛国詩人として評価されたかれの詩集『空と風と星の詩』からは、筑摩書房の高校国語教科書『新編現代文』にも日本語に翻訳された作品が掲載されている。この教科書は、同志社大学に詩人の記念碑が建立されるのにちなんで発刊された『星うたう詩人—尹東柱の詩と研究』（三五館、一九九七年）とともに陳列ケースに収められていた。

第二部は新設の建物で、ここでは李相高 Yi Sangseol（一八七〇～一九一七）の事跡を記念している。李は瑞甸書塾を龍井に開いたが、一般にはいわゆる「ハーグ密使事件」（中国語では海牙事件、一九〇六年）で国際会議開催地に入り込



図版2。「日韓脅約」の戯画
(李相高記念室での展示)

かった事態だが、今では「抗日」を合言葉にすれば、共産党革命イデオロギーに沿った展示にすら、積極的な資金援助を厭わない風潮が、韓国側に醸成されていることになる。仄聞するところでは、こうした韓国側のいささか過熱気味の民族ナショナリズムには、延辺朝鮮族自治州側の朝鮮族の識者の一部からは、かえって敬遠したいような、戸惑い交じりの違和感が遠慮がちに漏らされる折節もある、とのことだった。

これらの展示もまた、龍井という土地の特異性を際立たせる。というのも、先に触れた篠田治策はハーグ事件にも間接的に関与することになるからだ。李王職に就いた篠田は、最後の皇太子、李垠の引率役として一九二七年からその外遊に随行する。その記録が『欧州巡遊随行日記』（大阪屋号書店、一九二八年）として公刊されている。これとは別に、おそらく李王職で編纂したと推定される『李王同妃殿下御渡欧日誌』が存在している。李建志氏の研究によれば、後者に見える記述のうちのいくつかが、前者からは意図的に削除されている、という。そのひとつが、当然のことながら、一〇月二五日、二六日のハーグ和平会議場見学に関わる部分である。いうまでもなく、篠田による公刊記録には「ハーグ密使事件」への言及は一切みられない。それどころか篠田は、前述の

み、韓日協約の無効を欧米に訴えた中心人物として有名だろう。会場には「韓日脅約」と題した戯画を含め、参考資料が展示され、李の愛国者としての活躍が描かれている。これらふたつの資料館は韓国の資金援助により開設されたそう、韓国か

らの団体旅行客が次々に訪れては、朝鮮語の説明に耳を傾け、出口に用意された寄付金名目の芳名帳に競うように記名してゆく。これらふたつの展示は、ともに朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国そして中華人民共和国の政治的利害の微妙な一致点に焦点を絞って、抗日革命運動史を描き出す。一九九二年の中国との国交回復以前の韓国では考えも及ばな

『白頭山定界碑』で李のことを「不逞鮮人」の代表として言及している。李相高と篠田治策とは、ほぼ同世代人であり、双方とも国際社会における朝鮮あるいは大韓帝国の地位の認知に関わった。そのふたりの活動の出発点が、奇しくも日露戦争直後の龍井であった。だがそれがけっして単なる偶然ではなく、地政学的な必然をも秘めていたことは、すでにここまでの記述から明らかだろう。記念館の売店では朴青山編『延辺抗日革命史迹地』（延辺人民出版社、二〇〇二年）が販売されていた。ハングルによるこの著作には、李相高の事跡は詳細に記述されているが、そこには間島派出所初代領事の下で勤務した篠田の名前は見られない。ちなみに京城大学学長を勤めた篠田の文書は、現在では北米のスタンフォード大学に一括して保存されている、という（李建志氏の教示）。

（以下次号）

本篇は科学研究費補助金「東アジアにおける文化交流と知的システムの近代的再編成」海外出張報告—中国・延辺地区における近代東アジア文化交流と知的システムの再編成に関する調査の報告書である。

（国際日本文化研究センター教授）

日文研 四十五号

二〇一〇(平成二二)年九月三〇日発行

編集 瀧井 一博

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社